

聖書の眞理

第三十六號

一月號

主筆 江原萬里

教會主義と無教會主義 新年を迎ふ 一事は確實
善きことの發見 孤獨と友

主筆

イエス・キリスト

江原萬里

父なる神

神の國の教(上)

農村の疲弊と基督教

江原萬里

我等の天地

主筆

讚美の航跡一萬四千裡

八谷忠夫

柏木通信

齋藤宗次郎

身邊漫筆

江原萬里

謹賀新年

主筆

昭和八年一月一日發行

江原萬里著 (岩波書店發行)

宗教と國家(エレミヤ記の研究)

四六版四六六頁・定價一圓八十錢

(送料 十四錢)

私は此の小著を内村先生在天の靈に献げた。何となれば先生の獎勵なくして私は此の著をなし得なかつたであらうと思つたからである。最初私がエレミヤに深い興味を起したのは私が學生時代クリスマスの贈物として先生から研究十年を頂いて其の中に収録されてある「天然詩人としてのエレミヤ」を讀んだ時であつた。

爾來エレミヤは私の特愛の預言者となつた。大學を卒業して大阪の住友に勤めるやうになつた翌々年の夏、御殿場の東山莊で聖書研究誌讀者の家庭團樂會が催されて、私も數日の休暇を利用して出席し先生御一家と親しく交つた。其の時私はベネツトのエレミヤを懷にして裏山に上り、餘念なくそれを讀んで居た。突然背後から聲がする。振向くと先生がにこ／＼して立つて居られ、何を讀んで居るかと言はれ、其の本を示すと、どうだ聖書の研究誌にそれを譯して載せないかと勧められた。私が本氣でエレミヤを研究

しやうと志したのは其の時からであつた。

其の後暫くエレミヤから遠のいて居た時、或る年のクリスマスに先生はピークのエレミヤ二巻を贈られ、私にエレミヤ研究を獎勵された。數年後私が住友を辭して上京した時先生は尙私とエレミヤとを忘れず「君に此の前ピークをやつたが、ピークは君にはよくなかつたかも知れないと悔いて居る」と云はれた。

然るに私はピークで多く教へられたのである。それから又數年、私がエレミヤ研究を忘れて居ると突然先生は私に「君はスキンナーのエレミヤを讀んだか」と聞かれ、「あの本は是非讀み給へ」と勧められた。此の會合と此の勧めが此の世に於て内村先生との最後のお別れとなつた。そして先生に勧められて私が此のスキンナーを讀まなかつたならば、エレミヤについて之だけ書く氣にならなかつたであらう。かやうに絶えず私をエレミヤに引張つて行つて下さつたのは内村先生であつた。

前號 定價を約一圓五十錢と發表しましたが、頁數四百六十六頁となり、一圓八十錢でも岩波としては犠牲的出版の由です。私の署名を求められる讀者の方は、「聖書の眞理社」に申込まれば惡筆を揮ひます。

聖書之眞理

第六十三號

昭和八年一月一日發行

教會主義と無教會主義

●教會主義者の根本的誤謬は、否、少なくとも無教會主義者に對する場合の誤謬は、現在の有るが儘の教會の狀態と彼等が其の達成を理想とする教會とを區別せず、之を一つのもののやうに見て「教會」を辯護して居るところに在る。それ故いくら教會を辯護し、無教會主義を攻撃しても無教會主義者を納得せしめない。私は厚意を以て教會主義者に勧める。諸君は現實と理想とを明白に區別し、現實を現實として直視し、其の缺陷を承認し、さて之を匡正する道如何を考へられたい。

無教會主義者の缺點は、否、少なくとも教會に對する場合の弱點は、教會の現状を攻撃するが、教會主義者が

眞面目に熱心に其の達成を目的として居る彼等の理想の教會について充分なる同情と理解とを缺くことである。

それ故無教會主義者の精神は教會主義者に納得せられず其の主張は彼等に理解せられない。

●教會主義と無教會主義の根本的相違は、一方は「教會」を肯定し、他方は之を否定することではない。無教會主義者にも「教會」觀念はある。彼等は之を現實の教會と區別するため特に「エクレンヤ」と云つて居る。教會主義者と無教會主義者との根本的相違は二つある。

一、教會主義者は現實の教會と理想の教會とを同時に是認し、無教會主義者は理想の教會を是認し、現實の教會に價値を認めないこと。

二、教會主義者と無教會主義者とは理想の教會に就いて理想の内容を異にすること。

教會主義者の理想の教會は今現に存在する教會の理想化である。それ故、一定の信條、一定の儀式、一定の役員等一定の制度の下に組織され、一個の社會的營造物として地上に存在する理想的宗教團體を云ひ、無教會主義者

の理想とするエクレンシヤはかやうにここを見よ、かしこを見よと云つて目に見ゆる教團でなく地球至る所に存在するが、然かも捕捉し難き信仰ある者の精神的一致であるかゝる一致は明に有り得る。若し無教會主義者の理想に近い教會を我が國に於て求めば、嘗て徳川時代の儒者の教に由り「道」を奉ずる者が其の當時我が國の社會の鹽となり、世の光となつて以て明治に至らしめた其の如きものである。

●教會主義の理想の動もすれば墮落する缺點は、最も靈的であるべき福音の眞髓が社會的の制度と混同され易く、又此の社會的の制度を以て支持するにあらざれば之が此の地表から消滅するかの如き危懼を感じるところに在る。

反之、無教會主義の理想が動もすれば陥る弊害は、深い意味に於て最も社會的であるべき福音が眞實其の社會的意義を果さず、獨善主義となり易いところに在る。

教會主義と無教會主義とは、かくの如く異なる。さりとて兩者は互に他を排斥せずとも兩立し得られ、互に其の長所を以て他の短所を補ひ得る。私は教會主義者でな

いやうに無教會主義者でもない。何れの長所にも盲目であらざらんため彼等何よりも獨立する者である。それ故に徹底的に無教會である。

●私が徹底的に無教會であるのは斯やうに教會を否認するからではない。キリストに由る神の救の福音を信ずるからである。そして此の福音を世に傳へ度いと願ふからである。私は救のため教會を必要としない。それ故之を世に傳へ人々を教會に入るやう勧めない。私は又救のため教會外に在ることを必要としない。それ故之を宣べ傳へて人々を教會から出るやう勧めない。教會に在る者と教會外に在る者とを問はず、之に人生の最大の喜である福音の眞髓たるキリストとその十字架とを宣べ傳へやうとする者である。

嘗て此の福音が教會と混同された。故に之と同一視されないために無教會主義を唱へる必要があつた。今も尙ある。然かも其の結果は福音と無教會主義とを混同する者が生じて來た。爰に於て乎、之が混同を避けるために私は教會外に、又無教會外に獨立する者である。(主筆)

新年を迎ふ

一事は確實

一年の計は元旦にありと云ふ。我等新年を迎へて此の一年に何を期待するか。若し我が事業を大に發展しやうと企てば多分失敗に終るであらう。金もうけをしやうとせば失望するであらう。一かどの智者とならうとせば駄目であらう。

若し我等此の一年更に深く聖書を味讀し、神の愛、我等の靈魂の聖化、我等の身體の將來の復活、榮光の御國についての眞理を知り、聖き生活をしやうと願はば、其の願は聽かれるであらう。短かき地上の生涯を生甲斐あらしめ、歡喜に満たしめるものは聖書である。

人は希望に生くる動物である。若し善き將來の來る確信さへあらば現在の困苦缺乏に耐え、常に若々しく常に力に溢れ得る者である。若し希望を失へば今物に飽ともぢきに人は倦怠を感じる。而して來世にまで善き將來を保證し、絶えず人の心に歡喜と希望とを供し、之を活躍せしめるものは聖書である。

年は暮れ又明けたり。されど舊物依然、世は益々暗黒に向ひつゝある。肉の慾ははびこり、奢侈に耽る者、富に傲る者、他方貧に迫まり、病苦に呻吟しつゝ、其の一日も安らかならざる者、此等の呻く聲は地に滿つる。戰爭の噂至るところに聞え、暗雲低く迷ふ。

肉につける世はかくして滅びゆくのである。此先我等はどうなる。

一事の確實なるものがある。キリストに在つて神を知つた我等の靈魂は彼に由つて確實に護られ、決して世と一緒に滅びないことである。世の患難のうち在りながら、神の愛キリストの恩恵が益々我等を慰め勵まし、肉につける様々の困苦に由つて却つて我等の靈魂を聖化し神の者として來るべき榮光の神の國を嗣しめ給うこと、是である。神を知らず、キリストを知らず、只目前の幸福を求める者は世と共に滅びる。されど患難に在つて終りまで神に信頼する者には榮光の復活がある。

善きことと發見

人は物質的に餘裕があり、社會的に相當の地位を得なければ善き事を爲し得ず、又物質的餘裕、社會的地位以外に善き事を發見し得ないと考へる。大いなる誤謬だ。

善き事は世界至るところに在る。丁度惡しきことが世界至るところに在ると同じやうに在る。如何なる境遇にもある。如何なる地位にもある。貧者にもある。富者にもある。人から崇められる地位に在るやうに、人から見下げられる地位にも在る。如何なる境遇に在つても惡事をなし得るやうに善事をなし得る。

若し自分が思はずも不幸のどん底に陥り、悲しみの淵の深みに沈んだ時、その時そこで再起の力を發見し、大なる慰安を獲得したならば、之を以てどの位同じ境遇に在る人々を慰め力つけ得るかわからない。これこそ偉大なる發見ではないか。一國の總理大臣又は千万長者と雖もかやうな善きものを人に與へることは出来ない。人生の最有意義の善事は最惡の境遇のうちに見出さる。

○ 孤獨と友

我等は廣く友を得やうとして社交を爲さない。獨り家居して世界に友を得る。家貧しくして其の日の資に窮せんか、我等は我等と同じ悩みを有する人に心からの同情を寄せ、彼等を我が友とし得る。身病みて心わびしくあり、愛する者を失ひて暗中に生きんか、我等と同じく病む者と同病相憐み、我等と同じく不幸に在るものと悲しみを同じくし、彼等を我等の兄弟と呼び得る。我等若し人に顧みられず、惡し様に言はれ、獨り淋しくあらんか、我等と同じく人に棄てられ、孤立無援何人をも友として有たざる者の友となり得る。かゝる人は世に多い。かゝる者を悉く我友と爲し得て我等程世に友を多く有つ者はなくなる。

イエスはかゝる方であり給ふた。それ故萬人の友であり給ふ。我等も亦イエスを眞に理解して我等の孤獨は世界の萬人を友とすることを少しも妨げない事を知る。孤獨なる故に友あり、社交家に眞の友はない。

イエス・キリスト (四)

江原 萬里

九 父なる神

アテネ人よ、われ汝らが拜むものを見つゝ道を過ぐるほどに「知らざる神に」と記したる一つの祭壇を見出した。然れば我なんちらが知らずして拜む所のものを汝らに示さん。世界と其中のあらゆる物とを造り給ひし神は天地の主^イに在せば、手にて造れる宮に住み給はず。みづから凡ての人に生命と息と萬の物とを與へ給へば、物に乏しき所あるが如く人の手にて事ふることを要し給はず。……されど神は我等おのおのを離れ給ふこと遣からず。我等は神の中に生き、動き、また在るなり。汝らの詩人の中の或者ども、「我等は又その裔なり」と云へる如し

(使徒行傳一七・二二以下)

私はイエスの出現に由つて、人間の至上善である神の國が地上に到來した事を述べた。何となれば我等の至上

善はイエス・キリスト御自身であり、「彼を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる權を與へ給ふ。」(ヨハネ傳一・一二)からである。我等はイエスが完全なる人、即ち人の子として、父なる神に對して世の創造前、即ち永遠に保有し給ふ父子の關係に招致されて、神の子となり、神の國に入るのである。

されば、イエスは如何にして我等を神の國に招き、彼の有ち給ふ父なる神との子たる關係に入らしめ給ふか。私は次で之を説くつもりであるが、其の前、神はイエスの御父であり、我等は人として彼に在つて神の子たり得る素質のあることを先づ説明して置かねばならない。

絶對無限の神

抑も神は絶對無限にしてそれ自身完全に在し、其の存在に他の何物の存在をも必要とし給はない。パウロがアテネ人に演説した様に、

世界と其中のあらゆる物とを造り給ひし神は天地の主^イに在せば、手にて造れる宮に住み給はず。みづ

から凡ての人に生命と息と萬の物とを與へ給へば、物に乏しき所あるが如く人の手にて事ふることを要し給はず。(使徒行傳一七・二四、二五)

である。天地はなくとも、人はなくとも、神は完全に存在し給ふ。我等は此の天地がなくしては生存する事はない。親なくしては生れず、社會なくしては生活出来ない。然るに神は單獨に完全に、存在し、時空を超越して之に制限される事なく、天地の創造の前に永遠に在し給ふ者である。而して此の天地は或る時神が創造し給ふた。

絶對とは凡ての對を絶することを云ひ、無限とは限界のないことを云ふ。然るに我等の生命と我等の住む世界とは皆限界がある。而して物皆相對性である。

一人よりして諸種の國人を造りだし、之を地の全面に住ましめ、時期の限と住居の界とを定め給へり(同二七・二六)地上にあつては東と云へば必らず西あり、過去と云へば未來がある。東のない西はなく、過去なくして未來はない。善に惡あり、賢に愚がある。又我等の生命には始めがあり、數十年後終が来る。

悠久たる天地も亦或る時創造せられ、いつか終末が来る。然るに我等の創造主なる神はその上に高く在し、何物にも制限されず、自由に之を支配し給ふのである。

是故に神を呼ぶに我等は名を以てする事が出来ない。即ち神は何物なるか我等は之を定義し得ない。哲學者スピノーザは若し神を定義しやうとせば、消極的に神は何々でないと言ふ外はないと云つた。即ち、地上の何物も神に比べることが出来ないからである。我等が考へ得ることは神は在すと云ふだけである。モーセが神の御名を問うた時、「我はありて在る者なり」(出候及記三・一四)と答へ給ふたと云ふ。エホバと云ふは神の名はない。ヤーエエ、是無限の畏れ、絶大の虔みを以て我等が心の奥底から發する我等の聲である。

此れ故に、朝に生れ夕に死する微小の我等は絶對無限の神を知り得ない。我等の前に横はる茫洋たる宇宙の大すら究め得ない者が、どうして、此の大宇宙の創造主を知り得やうか。若し神自ら己を卑うして、自ら此の世界の内に己を顯はし、我等の心に理解し得るやうに、我等

が聞き得られる御言を以て我等に語り、我等が見得る御姿を以て我等の前に顯はれ給はずば我等は神につき其の御意ごいにつき、殆んど何をも正確に知ることを得ない。只之を臆測するだけである。

天地創造の目的

神が此の天地を創造し給ふたのは、別に神の存在のためが必要であつたのではない。又哲學者ヘーゲルの言つたやうに自ら宇宙と共に進化するため、即ち、神自身己を棄て、無意識状態に入り、宇宙の進化に伴ひ、そこから意識を回復し、宇宙に自己を實現し給ふために此の世界を創造し給ふたのでもない。神は宇宙の進化を伴はずして始めから完全に在し、宇宙の進化の原動力であり、其の終局目的であり給ふ。それ故此の天地と其の中に生を與へられた我等は、永遠に完全なる神が之を創造し、之を導き、神にまで到らしめ給ふのである。天地と我等とは偶然に生じたのではない。何處に往くやら往先のわからない放浪の旅をして居るのでない。搖るがぬ神の永

遠の聖意のうちにその目的は確定して居る。かく神は自己の存在のためには、此の天地と我等とを必要とし給はない。只神の愛を現はさんが爲に天地と我等を創造し給うたのである。只恵まんがために之を創造し給うたのである。——爰に愛と云ふは、人間の有つ愛情のやうな肉的感情を云ふのではない。愛は全人格の活動である。其の思ふところ全部、其の全感情、其の意志する凡てを悉く愛する者に注ぎ、之に己れ全部を與へ、而して其の中に自己を見出し、自分が其の者となつて生きやうとすることを云ふのである。之が愛である。故に愛の思ふところは愛する者を己の如く價値ある者と思ふことである。愛の感情とは愛する者と自分とは一つであると感ずることである。其の榮光を喜び、その衰へを悲しむ。而して愛する意志とは愛する者の最善を計ることである。然るに唯一、絶對、それ自身完全なる神の最善とは、神御自身以外にない。愛する者の最善を計るとは己自身を與ふることである。神は愛のために此の天地萬物を創造し給ふた。故に之に己を與へ、之と偕に生き、其の中に己を

現し己を見出し給ふ。神には此以上の愛はない。此の愛のために神は天地を創造し給ふたのである。

此の故に「もろもろの天は神の榮光を顯はし、穹蒼はその御手のわざを示す」(詩一九)。神天地に内在し給へば天地は活物となる。日月の運行に序あり、四季時を違へず、自然に嚴然たる秩序のあるのは、之れ神が内に働き給ふからである。然かも自然は只千遍一律に動く正確を極めた時計のやうな器械ではない。正確にして規則正しと見られる自然の法則なるものは實は神の御行動の習慣に過ぎないのである。神は自由なる人と同様、必要ある時は自ら定め給へる法則以外の特別の行動を爲し給ふ。是我等が奇蹟と稱ぶ現象である。我等の性格は我等の日常の規則正しい生活に由つて知られ、又特別の事件に於ける特別の行動に由つて知られる。その如く神の御性格は自然の法則に顯はれ、又奇蹟に顯はれる。

創造は漸進的

神が其の愛を顯はさんため天地を創造し給ふや、

之を一舉に完全なものとして造り上げ給はなかつた。天地の創造に六日を要し給ふた。其の創造の方法は瞬間的でなく、漸進的であつた。イエスは教へ給ふた。

神の國は或る人たねを地に播くが如し。日夜起臥するほどに種はえ出で、育てども、其の故を知らず。地はおのづから實を結ぶものにして、初には苗つぎに穂、つひに穂の中に充ち足れる穀なる。實熟れば直ちに鎌を入れる。收穫時の到れるなり。(マルコ傳四・二六—二九)。

然かも天地創造は六日間で完成し、神は最早遠くで休息し、只其の善美を眺めて居り、時々之に干渉し給ふのではない。(理神論)。イエスは云ひ給ふた。

わが父は今にいたるまで働き給ふ。我も亦働くなり。(ヨハネ傳五・一七)。

それ故に宇宙は絶えず進化する。神其の内に在して規則正しき御働の外に奇蹟を行ひ、新規の御働をなし、益々己を顯はし給へば、天地は日に日に新に又日に新となり、進化の行程に新創造が行はれる。初めに物質、其の

中から有機體即ち生命が顯はれ、次で生命の中から意識即ち心が現はれた。而して心は次第に心の主人を意識するに至つた。かくして人なるものが生れ出たのである。

人の創造

此の天地に人が出現するやうになつて、天地は自己を意識する者となつた。今までの心なき物質、盲目なる生命のみでは天地は何のために存在し、何のために生きて居るのか、自分で自分を知らなかつた。然るに人の出現に由り、萬物に價値が生じた。一つの土塊も金銀として尊重せられ、大空に輝く無数の星と野邊に咲く無名の花に詩があるやうになつた。人は天地を見、人生を考へ、眞理を究め、聖を願ひ、正義と愛とに生きんとして、天地萬物は人の心、即ち人格に關連して悉く意味あるものとなつた。

人は萬物の靈長、進化の極致、神が御自身すがたの像に肖せて創造し給ふたものである。その事は神と本質を同じくし、人は生れ乍ら神の子であると云ふのではない。心な

き日月星辰、さては鳥獸木石よりも、人の心は遙かに神の御姿に近いと云ふのである。人を人たらしめるもの、即ち人格は萬物中の最も神をよく顯はして居り、他の物よりもよりよく神を知り得ると云ふのである。それ故に天地に人が現はれて天地は己を知り、又その創造主を探り求めるやうになつた。

此人をして神を尋ねしめ、或は探りて見出す事あらしめん爲なり。されど神は我等おのおのを離れ給ふこと遠からず、我等は神の中に生き、動き、また在るなり。汝らの詩人の中の或る者どもも「我らは又その裔なり」と云へるが如し。(行傳一七・二七)

人が他の動物と異なるのは斯る人格を有つからである。人格とは自己を意識し、自分で思ひ、感じ、行動する自由なる主體を云ふ。自分の現在の状態を知り、又眞理、聖潔、愛、正義、限りなき祝福の生涯の理想を描き、之が達成を計る者、之が人格である。人はかやうな人格を賦與されて神に肖たる者となり、神を探し求める者となつた。勿論人の有つ人格は不完全であり、低く卑しく、狹

く小さい。それにも拘はらず、天地萬物、凡て造られた物のうち以上は尊貴なものはない。人は宇宙の大を思ひ、自己の微小を感じる。然かも誰かかやうに自己を知る者が他にあるか。人は永遠を思ひ、無限を慕ひ、神を求め、神のうちに自己の理想を見出すまでは満足しない天地創造は人格の創造に由り一期を劃した。

萬の物は人を目指して、

人を産みぬ。萬物に此だけの目的あり。

されど成し遂げて、人は新に始めぬ。

神を目指して進むことを。(フラウニング)

神が己を顯はさんがために、天地を創造し、己を卑くして之に内在し、之に己を興へ、己を其の中に見出さんとし給ふ愛の御働は、人の中に明に顯はれた。

抑も人格の中心は自由である。即ち、他の者に拘束せられることなく自ら思ひ、自ら理想を定め、自ら行動することである。人が人格を有つと云ふことは此の自由をもつと云ふ事である。然り而して、此の自由は若し之を濫用せば、己が創造主なる神の命にも反抗して自ら思ひ

自ら行動し得る自由である。それでなければ自由とは云ひ得ない。

神が人を創造し給ふた事は此の大いな危険を冒し、自己の絶對自由から自ら進んで或る種の制限を加へ給ふたのである。然かも神は愛の故に、敢て此の事をなし給ふた何となれば、眞に聖く、眞に義しき生活は自由なる本心から出たものでなければならぬ。只盲目的に不抗力に服つた生活は眞に神の生命を顯はさない。又若し人に自由の經驗なくしてどうして神の自由なる愛を知ることが出来やう。創造と云ひ目的と云ひ、之に到達と云ふが如き思ひは自由ある者にして始めて考へ得られるものである。されば眞の自由を知つて始めて神を知り得る。自由を知らない者の感ずる神は、天地萬物を創造し、己を之に顯はし、正義愛智慧に満つる人格者でなくして、只必然盲目の物力に過ぎない。

神の謙遜

かく人は神の自由無礙なる愛の創造の極致であつて、

其の賦與された人格は甚だ局限され乍ら、其中に神の御像に肖たるものあり、且つ無限の發達の可能性を有し、天の父の完全に在し給ふやうに、子としての完全たり得る素質を有する者である。されば、千九百年の昔、神は愛の故に「神と等しくある事を固く保たんとは思はず、反つて己を空しうし僕の貌をとりて人の如くなり。」(ヘリビ書二、六及七)我等の前に顯はれ給ふたのである。之れナザレのイエスであつた。人間に神の御像に肖た人格なるものがなければ、神は決して眞の人となつて我等に其の御姿を顯はし給ふ事はなかつたであらう。かくも人は神に價値あるものであり、かくも神は人を愛し給ふのである。

イエスは正真正銘の人として生れ給ふた。然かも彼の人格の奥底に、我等普通の人間のもたない特別の自覺があつた。即ち神の自覺があつた。此の事は既に詳しく説いた。イエスは我等と同じ人であつたが、然し我等と同じ罪ある人ではなかつた。否、我等は神の御像に肖せて造られた被造物であつたが、彼は天地創造前「神と偕に在

り」「神なる」永遠の言、即ち天地創造の原理、愛であり之れが肉體となつて我等の中に顯はれ給ふたのである。二者に類似と相違がある。此の事はイエスの御業と御教を解する時、常に忘れてならない事柄である。

イエスは神が人となり給ふた者である。然かも彼は神を父と呼びて之に絶對の信頼と服従とをなし給ふた。之により一つであり給ふた。然し乍ら若し神が我等のやうに個性を有し給ふならば、父なる神と子なる神とは二柱の神であつて唯一の神と云ふ事が出来ない。私は此の難問に答へる前にイエスの地上での御業、ついで聖靈の御業について語らねばならない。而して最後に神は父と子と聖靈の三位であつて、然かも一體であり給ふ事を語り度い。

一〇 神の國の教 (上)

イエスこれらの言を語りへ給へるとき、群衆その教に驚きたり、それは學者らの如くならず、權威ある者のごとく教へ給へる故なり。(マタイ傳七・末節)

不幸の幸福

私はイエスの出現に由つて神の國は既に地上に到來した事を語つた。何となれば、彼は神の國の萌芽であり、其の根本原理であるからである。それ故、私はイエスは如何なる方であり給ふかを詳しく述べた。彼は天地萬物の創造主なる神の獨子であつて、神御自身が眞人となつて地上に現はれ給うたのであること。その人となり給ふや、その意志、感情、思惟、目的、動機、性格悉く天に在す父なる神と相合致し、其の間に何の齟齬なく、背反なく、即ち一點の罪なく、眞に完全無缺の人格を有し、その言ひ給ふところは正、その行ひ給ふところは愛と謙遜であつたことを述べた。我等は彼を受け、彼を信じて

神を知り又神の子とせられ、神の國に入ることが出来るのである。

イエスの地上に出現し給ふた目的は神の國を建設することに在つた。彼の言、彼の行、悉く之に關したのである。即ち天に在す神の聖意の完全なる實現である神の國の如何なるものであるか、これに入ることの出来る者はどう云ふ者であるか、我等は何を爲せばよいか、如何なる恩恵を受け得るか、我等の爲にイエスは何を爲し給ふのであるか、之を教へ、且つその教を自ら實行し給ふたのである。其教は地より出でず、天啓の眞理であつた。

地より出づる者は地にして、その語ることも地の事なり、天より來るものは凡ての物の上であり、その見しところ、聞きしところを證したまふ。(ヨハネ傳三・三一、三二)

イエスの教は如何なる賢者智者と雖も、地から生れた人類が到底探求し得ない永遠の眞理の天的啓示であつたイエスは之を千九百年の昔ガリラヤ湖畔で漁夫たちに傳へて、以て全人類を教へ給うたのである。まことに

もろもろの人を照す眞の光ありて世に來れり。(ヨハネ傳一・九)

である。彼世に來り世を照して人類は新光明を得、その歴史に一轉機を劃した。

イエス教を宣べはじめて言ひ給ふ。「なんぢら悔改めよ、天國は近づきたり」……イエス遍くガリラヤを巡り會堂にて教をなし、御國の福音を宣べつたへ……給ふ。(マタイ傳四・二七―二三)

イエスの出現に由つて地上に建設せられる神の國は一體どんなものであるか、之について教へ給うたイエスの教は徹頭徹尾『福音』であつた。喜ばしき天來の音づれであつた。何となれば、イエスはガリラヤ湖の畔にて民衆の生活を熟視し、牧ふ者のない羊のやうに迷うて各己がじし彷徨ふ無智にして貧しく、病み、悩み、憂鬱、焦慮、失望、落膽、絶望に呻く、暗黒と死蔭に座する彼等に、お前たちこそ眞先に神の恩惠溢れ、生命に充つる神の國に入る資格があると宣べ給うたからである。之をしも『御國の福音』と云はずして何が福音であらう。

神が眞人となつて我等に教へ給うた永遠の眞理、彼が地上に建設し給ふ神の國は、人間の智慧を以て知り得ず能力を以て建設し得ないところの全く獨創的、而して又純福音的のものであつた。それは人類社會の中に在つて人々から廢物とされ、屑物とされ、社會の下敷となり、その暴虐と不義とに呻く者、裏店に住み日の光を見ず、襤褸を身に纏ひ、病に臥し、其の日の食に窮する者、或は人に棄てられて立つ瀬なき者、此等が何よりも先きに神の國に入り、限りない神の恩惠に浴し得る資格があると云ふのである。

幸福なる哉、貧しき者よ、神の國は汝らの有なり。
幸福なる哉、いま飢ゆる者よ、汝ら飽く事を得ん。
幸福なる哉、いま泣く者よ、汝ら笑ふことを得ん。
人なんぢを憎み、人の子のために遠ざけ^{そし}謗り、汝らの名を惡しとして棄てなば、汝らは幸福なり。その日には喜び躍れ、視よ、天にて汝らの報は大なり、
(ルカ傳六・二二―二三。)

これから先どうして食つてゆけるかと思ひ悩む者よ、

お前こそ仕合者だ。人間の一番ほしいと思ふ神の國はお前のやうな者のために備へられて居るのだ。今飢て今日の日の食にも窮する者よ、お前は仕合だ、きつと食を得られる。頼る親を失ひ、愛する子を失ひ、又妻と別れ夫と別れ、人生の味きなく、その暗黒に泣く者よ、お前は幸福者だ。今に笑ふ日が来る。若しお前がキリスト信者なるが故に人から馬鹿にされ、悪口を言はれ、棄てられた時は大喜びせよ。視よ、そう云ふ事のために苦しめられた者こそその報は天に於て最大である。かやうな神の國が今お前に近づいたのである。それ故お前らは皆悔改めて、即ち、今までの考へ方を棄てて、此の福音を眞理として受け容れ、その通りに生きよ。

之がイエスの宣べ給うた神の國の教の眞髓であつた。

若し之が宇宙の大眞理、人生の根本原理、天地萬物と我等とを創造し給うた神の聖意でなかつたならば、イエスは人類の大欺瞞者であり、その教は阿片でなければならぬ。然し乍ら、此の教が宣べ傳へられて以來千九百年の今日に至るまで、誰がイエスを大詐欺師としたか。マ

ルクス主義者以外に誰かその教を阿片としたか。古來此の教程、暗黒に彷徨う者に光明を與へ、悲痛に泣く者に慰めの力を供し、絶望のどん底に陥つた者に再起の希望を齎らし、人々の品性を高め、社會を向上せしめた者があつたか。

まことにイエスの教は學者には平凡に見え、虚妄に見える。金持には馬鹿らしく、貴族には下賤に見える。お上品なる紳士には無價値に見える。然るに眞實人生の行路に行詰つた者、人のたすけはなく、己に力なく、此の先どうして生きて行こうか途方に暮れる者、貧しくして家族が飢えつゝある者、病みて死の暗い影に襲はれて居る者、今泣きつゝある者、更に又自分の失策、過去に犯した罪に責められ、絶えず良心に悩み、廣い世界中何處にも自分を容れてくれるところがないやうに狭く感ずる者、かやうな者に取つては眞に天來の福音である。心から之を信じて、今まで知らなかつた新世界が眼前に展開し、新光明が輝く。神の限りない愛に包容せられ、神に義とせられ、永遠の喜悅に溢れしめらる。若し神の國と

はかやうのものであるならば、今苦惱のうちにあるものは何物を棄て、も此の國を求めるとはでないか。

天國は良き眞珠を求むる商人のごとし、價たかき眞珠一つを見出さば往きて有てる物をことごとく賣りて、之を買ふなり。(マタイ傳一三・四五)

である。彼等は此の世に執着する何物をも有しない。富も地位も名譽もない。それ故喜んで神の國の招きに應じ得る。丁度現社會組織の下に在る無産者が少しでも今よりも善ささうに思へる社會組織の建設方法を教へれば、彼等は直ちにその方に走る。彼等はいづれに往つても現在よりも損をすることはない。その如く、否、それ以上に、世の廢物、失敗者、病者、貧者、自己の犯した罪に悩む者は心から喜び勇んで眞先にイエスの神の御國を求めるのである。『幸福なるかな、心の貧しき者、天國はその人のものなり。』(マタイ傳五・三)

凡そ基督教を信受する者に二種ある。その第一は基督教を目して最高最美の道徳とし、之を實行することに由つて自分の品性を陶冶しやうとする者である。第二は基

督教を以て神の救とし、現在の自分の苦惱を醫されやうとする者である。兩者とも基督教を信する。然し乍ら、その信する意味は違ふ。第一なる者は基督教を眞理として實行することであり、第二なる者は基督教を救として身を委ねることである。而して第一なる者は第二の者を低劣として賤しめる。然るにイエスは言ひ給うた。

まことに汝らに告ぐ、取税人と遊女とは汝らに先だちて神の國に入るなり。(マタイ傳二一・三一)

と、何故か。自分の修養のために義しい善い生活を求める者の心には餘裕がある。彼等は現在の自分の生活に満足して居る者ではないが、さりとして之を脱却しなければ生きてゆけないのではない。それ故基督教を信じ、其の壯美の道徳を學ぶのは有閑的の道樂である。然るに現在不幸に悩み、人に棄てられ、又自分の犯した罪の苛責に苦しんで居る者は絶對絶命にそれから脱却したいのである。その救を求めるのは生きるか死ぬるかの問題であるかゝる者にして始めてキリストがわかる。神の國の喜悅がある。イエスは教へ給うた。

二人のもの祈らんとして宮にのぼる。一人はパリサイ人、ひとりは取税人なり。パリサイ人たちは心の中に斯く祈る。「神よ、我はほかの人の強奪、不義、姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。我は一週のうちに二度斷食し、凡て得るものゝ十分の一を献ぐ」然るに取税人は遙かに立ちて目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言ふ。

「神よ、罪人なる我を憫みたまへ。」

われ汝らに告ぐ、この人はかの人よりも義とせられて己が家に下り往けり。(ルカ傳一八・一〇—一四)

自分のうちに現在の苦難を切り抜け得る自信のある中は本當に神の救は解らない。生活に行詰つた者にして始めて我にあらず、人にもあらで全く不思議な神の攝理があることを經驗するのである。それで神を知るのである。自分は神に對して少しの罪を犯した事はないと思ひ、只心を純真に保ち、人を愛ればそれで神と偕に義しく歩んで居ると思ふ者にはキリストの十字架の贖罪はわからぬ。我が一生を顧みる時只我が眼前に在るものは過去の

罪のみ、正義の神は永遠の怒を以つて我が靈魂を注目し給ひつゝあると感ずる者にして、始めて御子イエスが我に代つて死に給うた死の有り難さがわかるのである。イエスは言ひ給うた。

健かなる者は醫者を要せず、ただ病める者これを要す。……我は正しき者を招かんとするにあらず、罪人を招かんとて來れり。(マイタ傳九・一二、一三)

我等の心に悲しみある時、悩みある時、その時こそはイエスを知り得る時である。そして人生の暗黒の彼方に光明を、悲痛を通じて歡喜を経験する。イエスの來つて建設し給ふ神の國に眞先に入り得る者は此等の者である幸福なるものは今飽き、今笑ひ、今富み、今譽められて居る者ではない。彼等はそのために永遠の御國を求めずその御光から遮斷される。「禍害なる哉、富む者よ、汝らは既にその慰を得たり」禍害なるかな、いま飽く者よ、汝らは飢えん」と。イエスの建設し給ふ神の國とはかゝるものである。(ルカ傳六・二四、二五)

(以下 次 號)

農村の疲弊と基督教

今我が國の農村は極度に疲弊して居る。その事は我が國は衰滅の危機に頻して居ると云ふのと同じである。何となれば我が國の人口の大半は農民であり、我が國は未だ農業國であるからである。何故農民がかやうに困窮したか。之から救ふ道如何、是熱烈に國を愛する者の痛切な關心事である。

經濟學者は云ふ。我が國土は極めて狭小、人口は甚だ過剩、年々増加する農民に對して新に耕地を提供する事が出来ない。勢ひ猫額大の土地に今では世界的驚異となつた程多量の肥料と勞力を投じて之を耕作しなければならぬ。米國では農民一人が平均三十二エーカーを、丁抹では十六エーカーを耕すのに、我が國では一エーカーにすら達しない。而して土地は一段歩三石の收穫に必要な肥料と勞力を二倍投下したとて六石を産出するものではない。されば我が國では明治四十二年から大正八年に至る十年間に一段歩に付一割八歩の増收を得たが、

以後増加せず、昭和三年以降は却つて減少するに至つた農村の疲弊は自然が我に福ひせざる爲であると。

然り、例令自然は我が國に吝であつても、若し經濟組織が完備して居たならば或は窮乏を救ひ得たかも知れない。假令收穫の割合は減少しても其の價格が騰貴したならば農村は苦しまないであらう。然るに近年穀價は他の物價以上に著しく低落した。他方租稅其の他の支出は逐年増加するばかりである。かく所得は急減したが、之に應じて歐洲大戰後の好景氣で上昇した農民の生計程度を急に低下することは困難である。爰に於てか借財は年々嵩んで來た。加之、戦後の好景氣に際し農村でも投機が盛となり、農民は先祖傳來の田畑を賣り拂ひ、又は之を質入して泡沫會社の株券を買つた。一朝反動來と共にそれが悉く反古同様となり、残つたのは負債のみ。

農村は都市の汚物の捨て場である。人糞を買つてゆくばかりではない。反古となつた事業株、廢物となつた女工、失業者、食ひつめ者まで收容する。かくして五十億圓以上の借金と租稅との重壓の下に苦しみ、之から脱出

の道を知らず、此の先どうして食つてゆくか。前途眞暗闇となつた。社會的大變動の危機は胎まれて居る。

政府は此の急迫事態を見て急遽臨時議會を召集した。然るに議會では滿洲問題の辯明に時を費し、救済策としては不急の土木事業を起して農民に仕事を與へやうとした位が頂上である。一二年後此等の計劃が實行し終つた時は元の空阿彌である。否、此のために費消した救済資金とその利息とは永く公課加重の形で農村を禍する事は火を賭るよりも明かである。

それ故今や經濟組織の根幹と政治機關の主要部に大變革を企圖する者が各所に起りつゝあり、今後政府の財政悪化に伴ひ其の運動は峻惡を増し深刻となりつゝある。今現に苦しんで居る者は『もたぬ者』であるが、近く來るべき日に苦しむ者はもてる者である。『禍害なる哉、いま飽く者よ、汝ら飢えん、禍害なる哉、いま笑ふ者よ、汝ら悲しまん』(ルカ傳六・二五)である。其の日は餘り遠い將來ではあるまい。

若し社會組織の大變革が眞に農村を救ひ、我が國の將

來に多幸を齎すものであるならば、我等は大に歡迎すべきである。然し乍ら、それは多分農村の現在の負債を清算するであらうが、自然の法則と看做される土地の報酬漸減の法則を阻止する事は困難であつて、農村疲弊の根本的原因は之に由つて除去されまい。大變革は農民各自の負擔を平等にするであらうが、今よりもその負擔を軽減しないであらう。否、却つて人々の眞の自由は剝奪され、精神的向上は妨げられ、中世時代歐洲諸國に存在した農奴と等しい状態に陥るであらう。我が國の農村を救ふ者は斷じてマルクスではない。レニンではない。

今や基督教が我が國を救ふか否かの試験期が到來した我等の信仰が閑人の道樂に過ぎないか、現に行詰つて居る農民をその窮困から脱出せしめ得るか。私は確信を有つ。若し我等基督教者が眞實その信仰に由つて起つ時は我が國の農村を救ひ得べしと。暗黒の中に大なる光明を供し、よく苦難に耐へ之を克服する勇氣と、自己の事を思はず近隣相扶け一村有無相通する友愛と、耕作に又新らしき事業に天來の智慧を供する者は基督教である。

我等の天地

私達の天地は人口過剰に悩む狭い島國ではない。地球がそれである。神は私達に之を所領として賜うたのである。私達は之をタンクと、毒瓦斯と、爆彈飛行機と軍艦とを以て征服しやうとしない。福音を傳播して此の地を嗣がうとする。

我が軍隊が寒風吹き荒ぶ滿州の野に兵匪を掃討しつゝある時、私達の同志は太平洋に、印度洋に、大西洋に讚美の聲を放ち、遠く航程一万四千哩の南米ブラジルの平野にまで平和の福音の種を蒔きつゝある。アマゾン河の緩るやかに流れる邊、アンデス山の高く聳ゆるところ、是神が私達のものとして與へ給ふた領域である。

私は最近山辨儀市君から左の書翰に添へて八谷忠夫氏の寄稿を得、一讀清新の氣に満された。我國の將來は海上に在る。若しそこに働く人々が皆八谷氏のやうな精神をもつて働いたならば、百年を出でずして我が國民はアングロ・サクソン以上の大國民となり、世界史上に大な

る貢獻をなすことが出来るであらう。私は本誌の讀者諸君に山辨、八谷兩君の爲しつゝある献身的海員及び海外移民傳道事業に對する滿腔の同感を切望する。(主筆)

謹啓(前略)先日御通知申上げました大阪商船ぶるのすあいれす丸の機關長八谷忠夫君が先月歸航いたしまして航海の話聞き、非常に愉快に存しましたので、同君に依頼して其記事を執筆して下さいと希望したのですが、海の子で筆に馴れないからとて遠慮せられましたが、其後航海中の激務の餘暇を割きて別紙を送られました。(中略)八谷君は明治四十三年東京商船學校を卒業した人で、大阪商船の優秀船ぶるのすあいれす丸の機關長ですから勿論技術上第一人者であります。此人が十數年前に聖書の研究誌を手にして以來熱心な讀者となり、海上生活中常に養はれて堅信を勝ち得たのであります。現實的な海員間にありてただ獨り信仰を維持するのみならず、常に傳道心に燃えて一ヶ年間毎日續けて聖書講義をなして多くの人と又數名の同志と祈り續けた其の熱心は敬服に堪えませぬ。(下略)

讚美の航跡一萬四千裡

八^{ヤミ}谷^{ガイ}忠夫

山榊教兄、

私は御承知の通り一介の海上勞働者ではありますが、主の陣營の一兵士たる事を光榮とし、大なる御恩恵の下に永年海上に活き働き來りし事を感謝して盡きない者であります。

今回ブラジルに移住された多くの同胞諸氏を御送りして十一月十七日横濱に歸港致しますと、同窓の先輩であり、且つ同信の長者たる貴兄が先づ第一に御訪ね下さいまして、歸國第一夜を他の一人の友と共に御宅に迎へられ、御歡待を受け、信仰談に夜を深しましたことは、まことに信者に相應しい上陸第一夜の樂みでありました。

その節、貴兄から此の航海の様子を書くやう御勧めを受けましたが、去る七月上旬横濱を出帆し、航海の途に

就かうとした時、嘗て誰からも受けたことのない力強い激勵の御言葉に添へて澤山聖書や傳道用の書籍を御贈り下さいました御好意に對しても、それをなす義務があると思ひましたから、簡単に様子を申上げること致しました。

日本とブラジル國とは其の間一萬三千餘哩を隔てては居ますが、現代の優秀船では四十五日で行かれます。七月九日神戸を出帆した時は約一千名の乗客があり、其大部がブラジル移住の人々でありました。何時の航海もこんなに往くのですが、この多數の人々が船内四十五日間と云ふものは別に爲すべき仕事もなく、只身體の保健に努める位のもので、従て兎角安快に流れ勝ちなのは止むを得ない事であります。若し此の與へられたる閑な四十五日を肉體上のみならず、精神上の保健に用ひ、平素生業の煩のため顧みなかつた魂の問題に就て學び得るならば、どんなに有意義であらうかとは、常に私の胸中を去らぬ思でありました。若し此の絶好の機會に彼等が福音に接することを得、之によつてブラジルに福音の種が一

つても蒔かれるならば、コーヒーの種の蒔かれるよりも更に有意義であらうと思つて常に獨り心が熱しました。のみならず、この殖民の勇者達にどうかして福音を傳へコーヒー園の生活に讚美と感謝とを捧げる心を與へ得られたならば、どんなに烈しい勞苦の中にも又淋しい生活の中にも慰めを得られ、之に堪え易くなるであらうと何時も思ふ所でありました。

前回の航海には、不思議な聖手の御導きにより、此の望みの幾分が實現出來て喜びましたが、今航には更に大きな希望を持って出帆致しました。夫は前申しました様に澤山の傳道書類の寄贈を受け、又聖書も四十冊程準備して居ましたからです。只善き機會が與へられん事を若い二人の同志と毎日祈りつゝ多忙な航海を續けました。

所が神戸を出帆して船客も船に馴れ、規律も立ち、凡ての統一が充分保たれる様になりました頃、同志の一人の知らせによりますと毎朝早く三等食堂の一隅で讚美歌の聲が聞へるとの事でありました。このよい情報を得ましたので喜びに溢れて、早速この一團の人に會ひました。

それは世田ヶ谷の海外殖民學校々長の崎山榮水先生（比佐衛）の御一家が家庭禮拜をして居られたのでした。

崎山先生は見た所五十幾年の老青年、幼にして信者の一團と北海道に渡り、一挺の鋏と信仰とを以て石狩平野に理想村を建設し、今や又一族郎黨を引連れて南米マゾンの地に好適の地を卜し、こゝに更に大なる理想村の建設を志して居られる方です。而してとくに殖民學校を東京郊外に起し、基督教主義を以て多くの元氣ある門下生を養成して海外各地に送つて居られます。信仰の勇者、靈の戰場往來の古つは者であります。大正二三年頃及昭和二、三年と二回も各々二年以上の日子を費し、南北米の地を踏破し、之に關する著書もあります。最近ベルーよりアンデスを越されたる記行は先生の近著「南米の大自然」と云ふ書に委しい。全く文字通りアマゾン大山脈を踏破せられたので、而かも此の大冒険の成功が事毎に感謝、讚美によつて成されて居る處など特に吾等が見て興味津々たるものがあります。（此の崎山先生が、貴兄の舊知と知つて其奇縁に驚いた事でした）。

此の先生と會見したのが神戸出帆後十日目でした。吾々乗組員は夫々忙しい船務を持つて居りますから、其餘暇でないとも何も出来ません。故に是非共傳道の精神に燃える勇氣ある乗客中の同志を探し求めて之と共に動かねば吾々だけでは到底黙目です。それ故先生に其の夕方集會を開催し度き希望を述べた所、即座に承諾を與へられたので、早速「今夕から基督教の講義を始めますから皆様御出席下さい」と同志青年に船内に振れ、歩かした所、約四十人程も集まりました。それで愈々船内傳道會を開く事となりました。聖書は準備してありましたが、持参した人も十數名ありました。誠に神戸出帆以來二人の同志と祈つて居た事が突如實現して良き教師さへも與へられた事は全く言ひ盡し難き感謝でありました。

劈頭先づ三七〇番「めさめよわが靈」と合唱しました實に福音宣傳の第一聲が茲に揚つたのです。響き渡る讚美歌の聲に何事ならんと來り怪しむ者もありました。大食堂の一隅には今や熱烈なる崎山先生の馬可傳の講義が始まりました。終つて二、三青年の魂を打つ様な證があ

りました。後此の人達に依頼して讚美歌を騰寫刷として明晩に備へました。之が西貢出帆の翌日で、熱帯地方航海中の事とてなか／＼暑苦しい時でありました。

翌二十日は新嘉坡入港、其の夕二回目なので定刻七時には四十名以上も集まりました。貸し出した聖書は參拾冊でありました。讚美歌も準備が出来ましたので、愈々本格となりました。其の夕も引續き馬可傳の講義終つて一同後部甲板に圓陣を作り、彼の青年達の指導によつて讚美歌の練習を行ふ事と致しました。此の日新嘉坡に居る一青年が來船して居ましたが、食堂より洩れる讚美歌の聲を聞き、同信の嬉しさに飛入したとて、感銘深きコム山に於ける信仰生活の體驗を語りました。

翌日は馬棘加海峽航海中。準備してあつた四十冊の聖書は全部出で、集會は六十名程となりました。かやうに段々傳道集會が大きくなり出したので、之に反對する人々も出で來て、抗議を申込む者もありましたから、協定の必要を感じ、遂に午後七時より三十分間大食堂の一部を使用する事に協定が出来ました。かくて吾々はコロンボ

より印度洋を南下し、東亞弗利加沿岸各港を経てケープタウンに寄港、夫れから一路大西洋を横斷し、ブラジル首府リオ着、更に上陸地たるサントス港到着、豫定日たる八月廿五日迄に尙三十幾日あります、此の間何等の障害の起らぬ様祈り乍ら、日日主の御名を讚美しつゝ最後迄一回も缺かさず集を續けました。

朝の崎山家の家庭禮拜は随分早くやられるのですが、之に列席する人も段々増加して、結句朝夕二回毎日集會を開く事となり、朝は馬太傳夜はマルコ傳の講義がありました。其の間にも毎週土曜日には私の室で有志の祈禱會を開き、各自船内傳道の爲め祈り、また親睦を計る爲め茶話會を致しました。かくて朝夕讚美歌を高唱しながら、主の御守の下に無事航海を續けました。ケープタウンでは遙か彼方に南極の空を望み、落日の美に打たれ、一人波打際の石に永い間腰を下ろして深い感激に打たれました。誠に主のいますに相應しい南の地の極のあの美はしい壯大無比な大空を眺めた事は今も忘れません。

南大西洋もアト幾百渾と縮まりました。かくて八月廿

一日の日曜日の夜には、早上陸の日も近く、日夜共に祈つた人々達が互に遠く離れて未知の新天地に散り行く日が近づいたので、その惜別會を催しました。家族の人も列席したので百五十名も集り、實に盛會でありました。

讚美歌の聲は滿堂を揺り動かし、感謝し祈り、新たに信仰を起した者の證を聴き、眼頭の熱くなるのを覺へました。實に言ひ難き恵み、誠に其夜は感謝の涙溢れて眠られなかつた程でありました。翌々日即ち八月二十三日には崎山先生御一家と「リオデヂャネイロ」港で御別れ致しました。先生一家はこの港で愛するなつかしい人々と別れ「アマゾン」に向はれました。誠に別れるに忍びない思が致しました。神の人モーセを殖民者の理想とする此の先生は、基督信者でなくては殖民者は決して成功しないと常に申して居られました。體驗による感想なのです。そして又アマゾン平野こそ、神様が日本人に残して置いて下さつた世界に只一つの寶庫たる土地だと申されました。

さて先生と御別れしてからも一同とサントス港で別れ

る前夜迄集會は續けました。「又會ふ日迄」を幾度歌つた事でありませう。馬太傳も馬可傳も最後迄終りました。イエス様の御一代は朝夕大凡八十回に涉り老練熱烈なる先生より、いとも平易で又素朴ではあるが權威ある言葉で語られ、皆々どんなにか御恵を頂いたか分りません。

聖書は皆に差上げました。「耕地に持て行つて下さい、船でした様には是非二人でも三人でも集まつて讀んで下さい。教へられた事を忘れぬ様に。讚美歌も山の中で歌つて下さい。祈りもするのですよ」と幾度も幾度も堅い握手をして別れました。御寄贈下された傳道書類も夫々適當のものを適當の人にあげました。

まだ「ベノスアイレス」行きの方は残つて居るので、非常に淋しくはなりましたが、最近迄續けました。かくて一萬四千湮の大航海は聲高らかに主を讚美しつゝ御恵に溢れたる航跡をば南支那海、ベンルガ灣、印度洋、南太平洋等に深き思出を残して茲に終りました。夫れから日本に歸る三ヶ月間も、船務支障なき限りは毎夕同志二人といと小さき集を續けました。大なる感謝でありました。

スミス博士のエレミヤ評

エレミヤは一生のうちに、律法が廢れ、民は散じ、國民的祭壇が毀られたのを見た。然るにその火を彼は己が胸の中に集めて之が消滅を免かれしめたのみでなく、更に淨い焰として永劫に傳へた。

爾來イスラエルの宗教中最美なるものは、其の起原がどの位遼遠であるにしても、彼の靈爐に由つて鑄直されたものであると云つて少しも誇張ではない。

柏木通信

(第廿五信)

齋藤宗次郎

柏木の近狀 靜かなるかな柏木の里、靜かなるかな内村家の邸内、靜かなるかな全集の編輯室、靜肅を愛する余は此處に靜かなる神の御聲を聽きつゝ其後の一ヶ月を送つた。目前なるバピロンの石垣を震はす赤化赤字の咆哮を懼れず、ゼネバア湖面を撓破する聯盟の虚偽の叫號を噴らすして、靜かに平和の勞働に従事し得るは大なる感謝である。時に友人葛卷星淵氏より惠與し來れる『伸び行く生命』の姿を机上に觀ては、此高著の内に澎湃する精神を靜かに嘆美し、井口喜源治氏が穂高山麓に病を得て臥床すとの報に接しては、基督の忠實なる老戰士の爲に靜かに其快癒を祈り、京都なる太田十三男氏が近く『愛國心と基督教』を編するとの通知に預つては靜に同情歡喜の返信を認め、更に『基督教愛國』の創刊豫告を讀んでは新日本の爲に欣び靜かに其祝福を冀ふた。

余は又最近内村全集の編輯に於て「日記下」の校正に當り、一年々々と進んで愈々其晩年に入り、遂に臨終に近づくの順を辿つた。思を凝して一字一句を検する間に靜かに其當時を思ひ浮べて、宛も此靜室に病臥せられし内村先生が、神に對する至純なる信賴の態度、個人と國家と人類に對する熱烈なる愛、大任を了へて招命に應ずる靜穩なる覺悟を見、先生の謙虛に臨む大能の御手の業を拜したる余は、今に至りて益々意味深き一瞬々々の光に觸れて感涙禁じ難きを覺えた。余の生涯に此の嚴肅なる境地を與へ給ひし我等の父なる神を讚美し奉る。

日曜日の集會 アダム樂園を逐はれて以來、清き平和自由の安息は人々の心に絶えて、天をも忘れ地をも解し得ぬ悲しむべき落莫に陥つた。之を憐み給ふ神はユフラテ河畔に選民を興し、長き教養と訓練とを施されて後、モーセに至りて崇神禮拜の途に添へて安息日遵守の恩典を賜はつた。去れど人間墮落性の跋扈容易に止まず、之が正守の實を現はし得ざりしは眞に憐むべきことであつた。然るにイエス一たび降り給ふて其眞精神を明かにせ

らるゝに及んで、人々の信仰生活の上に安息日は必需の恩恵として加へらるゝに至つた。恠に主に在りて神と偕に歩む解放自由の此聖日、奇しき尊き規定なるかな。然れどもア、然れども今猶之を偶像化して自らの精神を束縛し、又は遊逸娛樂に費して肉の爲に送り、却つて己を毒しつゝあるは痛嘆の極みである。人類同胞の爲に只管聖靈の愛護を祈り彼我共に父の憐憫に浴せねばならぬ。

一、神の國と其義を求めよ

名古屋常治

一、以西結書七章を學ぶ

寶田 一藏

一、偶像崇拜

齋藤宗次郎

一、イエスと偕に生くる途

佐々木良伍

一、キリストに在る和合一致

鈴木 敏元

水郷の友を訪ぬ

絶好の小春日和の一日、小閑を得て

霞ヶ浦の水邊に友人根本益次郎氏を訪ねた。朝八時上野發の汽車に乗つて關東沃野の菜園稻田の中を走り、綠樹の丘陵を負ふ手賀印幡の兩湖沼を右方に眺め、俗臭の成田を通過して郡驛こほりに着いた。其處より水郷の門と稱する森の神崎町を通り、流水靜かなる大利根の渡船場を越え

稻敷郡の水郭に入った。此處は禁酒の村である。境界地の高き標木に禁酒赤面の恥なしとの掲示を仰いで肅然たるを覺えた。所々に菊花薫る坦道を下りて蘆荻の間に搖櫓の音を聞きつゝ小野川の木橋を渡つた。橋畔なる高田村購買組合事務所に在つて其整理の爲に苦心努力中なる氏は、突然勞働姿の余を門戸に發見して不意の訪問に驚喜の態であつた。氏は僻邑の一青年の身として夙にキリストの召を蒙り、獨農村に立つて神の國と神の義の爲に戦ふこと四十年に及びし隠れたる基督者である。祈と信仰によらざれば愛の活動に出で得ざるを痛感する彼は、常に深き同情を以て内村全集と其の編輯員の爲に祈り呉るる所の人である。幸にして相見るを得たれば暫時人を避け密室に入り心を一つにして共に祈つた。隙間を漏れし其聲は湖面の漣波を傳ふて何處まで行つたであらう。我等出で、江戸崎町不動ヶ丘の公園に登り、遠く近く水國の壯觀を眺めて造主の恩寵を讚美し、寺門の傍に菩提樹の實を尋ねてベタニヤの無花果樹の昔を偲び、友よ、内外の戦は長く歇む時なからん、終まで忍び得ん爲に互

に祈り助けずやとの衷心の聲に共鳴して山下に惜しき別れを告げた。友は村に余は都に、時しも晩秋の夕陽は白髯の二人を照して榮光の望を靈深く注ぐが如くであつた。

大島正健先生を送る

十一月廿六日午後二時半、七十四歳の高齢なる先生が、單身冬の札幌に向はるゝを上野驛に見送つた。札幌獨立教會創立五十年記念會に出席せらるゝ爲であつた。牢記せよ、日本人と又世界の人々と、明治維新の初頭舊日本の粹を士魂に藏し、新日本の使命を心靈に宿せし數名の青年は、北緯四十三度蝦夷島の中央猛獸吼ゆる處女林に圍まるゝ新都市に起つて、信仰の獨立を全日本全世界に響つて宣言したる一事を、之は人類歴史上滅多に現はれざる神の事業である。其根ざす所は極めて深い。之あるが爲に文の日本、武の日本、財の日本は亡ぶるも信の日本は亡びない。假令花岡山に響きし人の誓約は消ゆることあるも、此荒野に降りし神の創業は永久に消えないと信ずる。光陰流れて半世紀の今日其處に胚胎せし純福音の精神は、全國に亘り力となり、生命となつて不動の根を下すを見るに及んで、天上

の喜び地上の感謝相響き相合するものあるは將に當然のことである。我等の敬愛する大島老先生は、實に其小にして無限大なる光景を飾りし一人であつた。氏を迎ふる宮部金吾老博士と俱に當時を回想せらるゝ時に、如何の感あるか我等は之を推知することは出来ない。汽笛と共に發車するや、車中に直立して老青年なる余の雙眸を凝視しつゝ好意を表せられし顔貌は、恰も内村先生のそれに似たるものあるを感じた。長途の旅に祝福あれと念じつゝ獨編輯室指して歸り去つた。

洗足會例会

十一月廿三日西郊鶴木なる名古屋氏宅に開く。十餘名の會員は日々各自命ぜられし業務に従つて主に仕ふる所の者、今日は一堂に會して愛の應酬に當り得るかと思ひ、譬へ難き愉樂を懷いて集つた。——午後三時主人司會、二四六番の歌を合唱して神を頌め稱へ、詩三七篇を朗讀してダビデの尊き實驗に聽き、各自の靈に真理の糧を供せらる順次有益なる感話、熱心なる祈禱眞摯なる議題の解決をなし、函嶺の彼方に夕陽が茶園麥圃を彩る頃、樂しき晚餐に移り感謝に溢れて散會した。

身邊漫筆

○私がかやうに傳道師となることを極度にきらつた理由は二つある。その第一は私が學生時代に愛讀したカーライルの感化であつた。當時私の精神生活に最も大きな影響を與へた者は内村先生と彼であつた。私の所持するカーライルの衣裳哲學(サーター・レザルタス)の如きは表紙がぼろぼろになるまで愛讀した。そのカーライルが彼の最も敬愛した母の願望にすら背いて傳道師となることを斷念した理由に私は深く感じたからである。何なりと彼の著書を開けて見よ、彼が口を極めて痛罵したものは不誠實、不眞實である。殊に當時の傳道師の僞信 Cant である。自分で信じて居ないことをさも信じて居るやうに教へ、又人から教へられたことを其の儘呑みとして宛かも自分の信仰であるかの如く自分で自分を欺く其の不眞實、カーライルは極度に之を憎んだ。そして私も亦傳道師がいやになつた。

○第二の理由は傳道師は生活上、思はず知らず人に媚び

眞實の獨立を失ひ易いことである。自分が傳道するのは何等か人に他の事を以てするよりも遙かに善い者を彼等に與へるとの自信があり、彼等から受くる報酬は感謝の献げ物でなければ傳道師となるべきでない。

○昨秋私は某夫人の來訪を受けた。十數年振りの面會であつた。其の長男は天才と云はれて多くの人から賞讃されて居る。彼は元基督教を信じて居たが今では之を棄てて共產主義者となり、刑務所に收容されて居るのである。私は何故彼が基督教を棄てたかについて非常の興味を感じた。その主なるわけの一つはこうだとの事である。

○彼の隣家に教會から放逐された傳道師が住つて居た。その衣食に窮して居るのを見るに見兼ね、彼の母が自分の身を削つて援助した。然るに寡婦の身として到底やりきれないので他に轉居したところ、又もや其の傳道師は新居の附近に引越して來た。それを見て彼はこうして居れば自分の家は其の傳道師の食ひ物となつて仕舞うであらうと思つた。之が棄教の理由の一つだとの事である。

○私は之を聞いて何とも云ひやうもない、いやな醜惡な

恐ろしいものを見た感じがした。私はつくづく傳道師となる事がいやになつた。孫子の代まで傳道師にだけはならせ度くないと思つた。私は人に厄介視せられ、負擔となるならば、斷然傳道をやめる。元々私は自分から發意して傳道して居るのではない。私は思ふ。我が國に於て最も大切なものと云はば傳道である。滿洲問題、農村問題、爲替問題、更にフアンズムと共產主義の問題、かかる問題が續々起つて國の前途に深憂が横はつて居る。どうしたならば日本の國を羨しい國とし、太平洋に眞の平和を來らすか、キリストの福音より外にない。此の重大なる任務を負つて居る傳道師の生活は基督者たる者は皆で之を支持すべき義務があると考へる。

なんぢら知らぬか。聖なる事を務むる者は宮のものを食し、祭壇に事ふる者は祭壇のものに與るを。斯の如く主も亦福音を宣傳ふる者の福音によりて生活すべきことを定め給へり。されど此等のことを一つだに用ひし事なし。また自ら斯く爲られんために之を書き贈るにあらず、斯くせられんよりは寧ろ死ぬ

ることを善しとすればなり。誰もわが誇を空しく爲さざるべし。(コリント前書九・一三一—一五)

そうです。今の不信の世に、福音が安價に見られる世に、否、厄介視せられる世に、本當の傳道する氣ならば餓死する覺悟が必要である。私は或る傳道師が、自分は損益のために雑誌を發行して居るのではない、自分の思想が續く限り雑誌をやめないと斷言し、又他の傳道師が自分はたつた一人でも話を聞いてくれる人がある限り、傳道すると云ふのを聞いて、其立派な覺悟、悲壯な態度に敬服した。これでこそ眞の傳道師であると思つた。だが同時に私は考へた。雑誌が相當に賣れて實際に損失がなく、聴衆は門前市をなして居るからよいやうなもの(それは此の悲壯な覺悟があるからでもあらうが、)萬々一自分が心血を瀝いだ雑誌が少しも賣れず、聴衆は少しも來らず、他に何の收入もない時は、一體どうして雑誌を發行され、講演會を開かれるか。その時、前の傳道師のやうに「寡婦らの家を呑む」(マルコ傳二・四〇)となしに傳道を續けられ得られるであらうか。

餓死する覚悟で傳道しなければ眞の傳道師ではない。だが、覺悟だけでは足りないのである。覺悟する事はまだ容易である。他人の迷惑、負擔とならないために、實際其の場に臨んで餓死が出来るか。それは自分だけの事ではないのだ。妻や子も一緒に餓死する事である。傳道師となる事は戯談事ではない。私は明言する、本來の私にはその自信がない。だから昔から傳道師となることをいや、今でも出来るならば逃げ出したいのである。噫、然し、然し、私は或る者に捉へられ、終世その奴隸とされた者です。私は自分で發意して傳道に従事しなかつた前に言つたやうに、何者かが私の潜在意識中から私を捉へ、私の意志を強制し、私を今ある如き私として仕舞つたのである。私は逃げる事が出来ない。眞に已を得ずして之を私の天職として福音を宣傳へて居るのである。

われ福音を宣傳ふるとも誇るべき所なし、已を得ざるなり。もし福音を宣傳へずば我は禍害なるかな。

○私がエレミヤに深厚の同情を有ち得るのは此の經驗からである。彼は云つた。

エホバよ、われ知る。人の途は自己によらず、歩行者は自ら其の歩を定むること能はず。(一〇・二三)と。私も亦自分で自分の生涯の方針を定め、その目的に向つて進む事が出来ない。或る者に強制されて居る。

エホバよ、汝はわれをすかし、我は汝にすかされまつりぬ。汝は餘りに強くして我を遂に敗かし給へり。われは日々物笑となり、人皆我を愚弄するなり、：ここをもて我若し彼を思ひ出さじ、御名をもて語らじと云へば、我が胸のうちに燃ゆる火のごと、我が骨の中に閉ぢ籠り、抑へんとして勞れ果てつ。默さんとしてもだし得ず。(二〇・七一九)

かやうにしてエレミヤは「我が胸のうちに」潜在する我ならぬ我に身を委ねた。そして餓死すると同じだけ、否それ以上の苦難を身に受けた。エレミヤの悲哀は世の人から厚遇されず、迫害された事ではなかつた。何故彼を「腹につくらざりし先に知り、胎をいでざりし先に聖別し」給ふた神がかやうな運命に預定し、これから少しも救ひ出さうとし給はなかつたかそれである。神から永遠

に十字架を負ふ者と預定されたと感ずる悲哀、世にこんな深刻な悲哀が又とあらうか。

○若し私を捉へ、私を曳きづりゆく、我ならぬ我が斯くの如きものであるならば、私はとても堪える事が出来ない。然かも彼に身を委ねる外往く途はないのである。私は學生時代から今に至るまで彼から逃出することが出来なかつた。住友に行つても、視よ、彼は彼處に在し、大學に逃げて又もや彼は私をそこから逐ひ出し給ひ、大學を辭して今に至るまで彼程私に密接なるものはないのである。私は生命がけで彼の正體を究めやうとして居るのはそのためである。私は傳道師ではない。彼に捉へられ彼の命のまゝに強制せらるゝ奴隸である。私は學者ではない。自分の全生涯の最大の關心事として彼の正體を見究め様として居る者である。若し彼が暗黒なる運命、私を無理に驅つて餓死せしめるのみか、私の靈魂を永遠の暗黒にまで引入れるものであつたらば、私は禍害である。

○然るに私は彼に導かれ、無理にも彼に服従して来て、遂に彼の正體がわかつた。果然私を導きつゝある者は暗

く見ゆる光明、禍害に見ゆる恩恵であつた。それを確信するには私の心の中に在る彼と別に、他の或る者の啓示に據つた。それは昔ナザレに生れ、十字架に釘つけられて死し、死して甦り今生けるキリストである。私は彼について聖書を研究して次第に私の神を知るに至つた。内なる聖靈と側なる活けるキリスト、此の二方によつて私は父なる神を知つた。神は私には實驗上三位で一體であり給ふ事を確信せしめられた。

○私がどうして活けるキリストを知るに至つたか。此の事を語る程私に喜びはないのである。それは私が將さに學校を卒業し、社會に出やうとする時であつた。私は其の頃社會に出てから何をするか。私の天職は何であるかについて苦しんだが、その頃私にはそれ以上に深刻な煩悶があつた。それは死の問題であつた。私は近く死ななければならぬと感じたのである。何故に、當時大して健康ではなかつたが學校を殆んど一日も休んだ事のない私がかく感じたのは單に私が不健康であるからと云ふ理由ではなかつた。何とも云ひ得ない大なる暗黒が私の靈

魂を覆うたからであつた。そして私に THEOU SHALL DEI と云つたのである。私は眞實罪なる者を知つた。どうしてそれから脱し得るか。私はこのために悶え、卒業試験の準備に手もつかなかつた。

○然るに忘れもしない。或る夜の事である。私は此の恐怖の王に見舞はれて轉々懊惱し、どうする事も出来ないので聖書を開けて見た。その時に第一に目についた文字はヨハネ傳の「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬるとも生きん」(一・二五)次にルカ傳の「それ人の子の來れるは、失せたる者を尋ねて救はんが爲めなり」(一九・二〇)であつた。私はその文字を読んだ時、私の靈の耳に丁度その聲を聞いた。加之私は其の時輝く大なる光を見た。私は歡喜に躍つた。其の時私の救主「我」と云ひ給ふた者は此の輝ける生命の主であり、且つそれは聖書のイエスであり給ふ事を知つたのである。爾來私は彼を見上げて私の救主とし、私の到達點とした。私は益々深く聖書によつて彼の地上の御生涯、私の罪のための死と復活とを學んだ。

○若し私が彼を知らなかつたならば、私の心の奥底に在つて私を強制する或る者にかばかり心惹かれず、結局彼に屈服する事をしなかつたであらう。抑も「お前には別にする仕事があるぞ」と私に絶えず囁く聲の聞へる様になつたのは、私が活けるキリストを知つてからである。それまではその聲を聞かなかつた。然かもキリストはキリストであり、内なる御聲は彼とは別な御聲である。

私が聖靈の人格を確信するのは此の經驗からである。○聖書についてキリストを知れば知る程、聖靈は内から私を導き給ふ。而して罪人なる私をして父なる神に歸へらしめ給ひつゝある。キリストが私の罪のために受け給ふた十字架の死の意味は私を導き給ふ聖靈が之を人生の實驗に於て私に教へ給ひ、キリストの死に由つて私の周圍の暗黒の彼方に神に至る道の既に開かれて居る事を知る。世の如何なる困難、不治の病患、餓死が、キリストに由る神の救から私を離らす事のない事を確信せしめる。それは私の衷なる聖靈が私を捉へて離し給はないからである。之が私の基督教である。

謹 賀 新 年

主 筆

私は數年來年賀狀を廢して居ります。それ故讀者の方からそれを頂いた時心ならず其の儘貰ひ放しにします。私の賀狀は本誌であると御承知下さい。又讀者の方からも通り一篇の謹賀新年よりも夫々その心境や身邊を知らせる通信を頂き度く願ひます。我等共通の興味あるものは本誌に載せ、互に喜び又同情し合ひ度くあります。

左の書信は大阪住友俱樂部に於ける聖書の眞理の會の模様を知らせたものであります。私は近來こんなに嬉れしく思つた事はありません。私が住友を去つたのは今から十年前であります。然るにそこにこんなに澤山の既知未知の友人がある事を知らされ、私共各自の信する福音が到底世間的、同業的、同趣味的交際と比べ物にならない深い交際をなさしめ、永遠に私共の靈魂を靈魂に結びつけることを感じました。大なる感謝です。

田中さんを通じて連なる葡萄の枝。宮島又信、大久保久三、神原寅之助、木津雅次、佐藤雄藏、武林鶴夫、岩竹忠治郎、安藤善行、久保田徳天、好川増輔、川谷宮太郎、横山廣一、川口弘、永島菊三郎、清地義雄、古瀬軍式、

西垣佐太郎、小笹隼夫、關原多喜知、我汝を孤兒とせず
(ヨハネ傳十四、一八) 池須健三。

聖書の眞理がともかくも五週年を通過し、第六年目に入つた事を眞に慶ぶ心から『聖書の眞理の會』を午後六時から住友クラブに於て開催致しました。集まつた者は右の二十名と小西梅太郎氏と僕、都合貳拾貳人。

大久保君の開會の祈禱に續いて自己紹介旁々各自の所感を述べていただき、最後に宮島氏の閉會の祈禱を以つて感銘の深き此の會合をとちました。(九時半)。集られた方々のうちには主筆を知つて居る人の方が少く、一度御目にかゝりたいと云つて居る人が多くあります。

皆様の御感想を語るうちに主筆に對する深き感謝と主筆の健康恢復を祈る切々の情とを聴取して私は只管感泣致しました。

昭和七年十一月二十五日夜

田 中 良 雄

江 原 萬 里 様

此の友愛溢るゝ書翰に接して私も眞に感激しました。かゝる人々のため私の生涯が役立ち得るならば、此の後どれだけ苦しんでもかまはないと思ひました。どうか本誌の讀者方は互に一層知り合ひ相愛しやうではありませんか。此の意味で各地に聖書の眞理會が開かれ度あります。

内村鑑三著・太田十三男編

愛國心と基督教

百七十頁・定價五十錢

我が國の精華は武士道である。若し此の武士道を世界的のものとなし得ば、恐らく是以上の愛國はないであらう。而して基督教はそれをなし得る、且つ我が國人の信する基督教はかゝる基督教でなければならぬと云ふ、内村先生の所論數十篇を収めたもの。編者は海軍少將。(一粒社版)

葛巻星淵著

信仰 伸び行く生命

百四十四頁
定價三十錢

前記内村先生の所論がどの位深く日本固有の忠孝道徳に影響を及ぼし、之を醇化し、東洋全體に普及せしめんとする理想を懐かしむるに至つたかを歌へる長詩。辭は稍硬いが精神は燃えてゐる。多分此の書は舊を重んじ且つ新を啓かんとする者に共鳴者を見出すこと尠なくないであらう。(獨立堂版)

宮部金吾著

内村鑑三君小傳

近刊

内村先生と札幌時代から終生滄らざる親交をされた著者なれば小傳と雖も價値甚だ大ならん。(獨立堂書房)

傳導リーフレット

通信

友人矢内原忠雄君が知人に配布する目的で發刊されたもの、毎月一回の豫定希望の方は東京市目黒區自由ヶ丘二九二同氏宛申込まれたし。(送料月三錢)

聖書の眞理定價 (送料共)

一 半年(六部)	二十錢
二 一年(十二部)	四十錢
海外(二年)	六十錢
拂込は聖書の眞理社 (振替東京六三三七五番)へ。獨立堂にてもよし	

江原萬里著

聖書の現代經濟觀

(聖書の眞理社にて扱ふ)

定價 一圓二十錢
送料 八錢

昭和七年度聖書の眞理

合本(定價送料共) 二圓半

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三
編輯印刷 江原萬里
兼發行人

發行所 東京市澁谷區向山町九七

聖書の眞理社

東京市神田區三河町三ノ四

印刷所 今井印刷所

東京市淀橋區柏木四丁目九四六

發賣所 獨立堂書房

振替東京一九六六番

【本誌定價二十錢】